

インタビュー Interview



地元に住む人として、
自分も何かしたかった

たけし
佐久間毅之さん(鎌数)

ボランティアへ行こう、と思ったのは「地元の災害だから、地元に住む人として自分も何かしたい」という気持ちからです。

ボランティアセンターでは、下永井地区にある1軒の家へ派遣されました。辺りはものすごい状態で、家の窓には津波の跡も残っていました。その家では、床下に潜り、一面に堆積している海砂をかき出す作業をしました。とにかく、臭いがすごかったのを思い出します。

自分は、食料と水・スコップ2本を持って、長靴を履いて行きました。革製の手袋をしていったのは正解だったと思います。軍手では、小さなくぎや鉄さびが貫通してしまいますので……。あと軒下に潜り込むときには、ヘルメットがあれば良かったと思いました。

ボランティアに参加して本当に良かったです。もしあのとき何もせずにいたら、自分は今でも後悔していたんじゃないかと思います。



家屋の中から荷物を運び出すボランティア



海水や泥を丁寧に洗い流す



インタビュー Interview



本当にボランティアの
皆さんに助けられました

なみかわおさむ
瀧川理・和子さん(横根)

家は店を営んでいましたが、津波で全壊。家の中も、畳やらたんすやらがみんな浮き上がって、泥やがれきですごい状況でした。

家の片付けは、避難所から通いながらやりました。ボランティアをお願いして、3月の末までに、延べ600人くらいのボランティアが片付けを手伝ってくれたと思います。主に家や蔵の中の物を運び出して処理したり、泥をかき出して運んだり。ボランティアの人は本当によく働いてくれて、何かを頼んでも、すぐに一生懸命やってくれました。誰一人嫌な顔一つしません。本当にあの姿勢には感心しました。

自分たちだけでは、途方に暮れて手が付けられなかったと思いますし、ボランティアがいなかったら、これだけ早く街も片付かなかったでしょう。本当に皆さんに助けられました。



砂をかき出したり建物の片付けをしたり、ボランティア活動は多岐にわたる



子どもからお年寄りまで多くのボランティアが力をくれた

第2章 支える心

人々の優しさが復旧を早めた

ボランティアによるがれき撤去

市は、3月11日付で「災害時応急工事等の協力に関する業務協定書」により、旭市建設業災害対策協力会へ協力を要請。翌12日には、道路上にあるがれきの撤去が開始された。また3月16日には、社会福祉協議会内に「旭市災害ボランティアセンター」が立ち上げられ、全国各地から計7、600人を超えるボランティアが、連日がれきの撤去や海砂の除去などを行った。地震発生から20日後の3月31日には、それまで道路や家の庭を埋め尽くしていた泥やがれきは、ほぼ片付けが済み、災害ボランティアセンターは閉鎖された。

災害ごみの処理

これまでに運び込まれた災害ごみは、合わせて110、661t（1月26日現在）。これは市が1年間で処理するごみの約4・6倍にも達する（平成22年度処理量24、124t）。これらのがれきは、海上中跡地、飯岡野球場、海上野球場、市営駐車場（三川浜）、野中（資材置き場）、飯岡漁港用地の、市内6か所の仮置き場に運ばれた。一時山積みになっていた災害ごみは、4月11日以降分別を始め、5月から処理業者が搬出・処理を行った。今月中にはほぼごみの分別が終わり、来年度5月下旬には各仮置き場（一部を除く）の現状復帰も終了する予定である。



重機を利用した排水溝の泥さらい



山積みされた災害ごみ（飯岡野球場）